

熊本大薬学部(熊本市中央区)で8月27日、「熊本版白熱教室」と題した夏季ワークショップがあり、立教大大学院の萩原なつ子教授59が「働くことやジェンダー」をテーマに講義した。萩原教授は「社会活動をするなど複数の顔を持つことで、新しい仕事をつくり出すこともできる」と呼び掛けた。

熊本大版「白熱教室」

若い世代の意識を高めようと、熊本大が県内の大学生を対象に開催した。授業は、国内でもテレビ放送され、話題を集めた米ハーバード大の人氣講義がモデル。約70人が参加した。

萩原教授は広告代理店で働いていたが、結婚を機に退職。その後、大学院で学びながら出産。38歳で短大講師の職を得た。「経済的に自立でき、夫に依存しなくてすむ安心感が得られた。男女ともに経済的、精神的に自立すれば、危機管理にもなる」

ただ現状は、第1子出産後に仕事をやめる女性も6割に上り、育児と仕事の両立の難しさを物語る。両立を阻む理由として、萩原教授は長時間労働の存在を指摘する。「この状況を変えていかなければ、男女ともに共倒れ

になってしまふ。働き方を変えれば、仕事と社会活動の両方ができる。いくつもの顔を持ち、ネットワークも広がる」複数の視点を持つことは、「新しい仕事」にもつながる。「仕事は必要

に応じて生みだされるもの」と話す萩原教授は、キャビンアテンダントを例に挙げる。飛行機の乗客の病気に対処するため、看護師が同乗するようになったのが始まり。そう説明した萩原教授は「会社で働くほか、自分で仕事をつくり出すという方法もある」と述べた。続いて学生たちはグループに分かれ、「働くこと」をテーマに討論。社会にはどんな仕事があるのか、やってみたい仕事



「熊本版白熱教室」で、「仕事」について話し合う学生たちと萩原なつ子教授(中央) =熊本市中央区

は何か。医師、農業、歌手、消防士、社会福祉士…。具体例を挙げると、さらに1人の人物が複数の「顔」を持つことについて考えた。「医師で農家」「保育士でパン店経営」「社会福祉士の資格を持つ大工」など、ユニークな人物像が次々と浮かび上がる。それが実現したら、どんなことができるのだろうか。医師で農家は「食べ物の中から医療に向き合える」、保育士でパン店経営なら「焼きたてのパンが食べられると、子どもたちが喜ぶ」、社会福祉士の大工だったら「ユニバーサルデザインに配慮した建物ができる」。学生たちの白熱した議論が続く。議論を見守った萩原教授は「キーワードは連携と共同。例えば、農家と医師が連携すれば、新しい仕事を生み出すことができる。複数の顔を持ち、さまざまな経験を積んでほしい」と助言。熊本学園大社会福祉学部2年の吉永早希さんは「やりがいのある仕事をしたいし、結婚も出産もしたい。学びや経験を積んで、女性も働き続けられる社会をつくりたい」と話した。(森本修代)

「医師で農家」「保育士でパン店経営」 複数の顔 新しい仕事生む

若い世代の意識高める